

鎌高新聞

発行 神奈川県立鎌倉高等学校 校長室

令和 3 年 11 月 22 日 第 7 号

渋沢栄一と大学

今月の 11 日は何の日だったか分かりますか。「ポッキーの日」、「チンアナゴの日」、「麺の日」、「介護の日」だそうです。介護の日以外は、その由来が何となくわかると思います。

「介護の日」は厚生労働省が平成 20 年、パブリックコメントの結果に基づき発表しました。理由は「いい日いい日」にかけ、親しみやすいからだそうです。この 11 月 11 日は、現在 NHK 大河ドラマ『青天を衝け』（主演 吉沢亮）で描かれている渋沢栄一の命日でもあり、彼は 1931 年 11 月 11 日満 91 歳でお亡くなりになりました。筆者は 10 年以上前に、渋沢栄一の生家(埼玉県深谷市)に訪れたことがあり、家業は藍玉(藍の葉を発酵・熟成させた染料の原料)を営んでいました。彼は若い頃、藍の買い付けや、売りに行くため、幾つもの山や峠を越え、渡河している時に、漢詩の一節「勢衝青天攘臂躋 氣穿白雲唾手征」と詠ったといわれています。「青天を衝け」とは、どのように解釈しますか。青空に勢いよく駆け登り、手に汗をかき白雲を突き抜けるという意味ですか。

渋沢栄一は、「日本資本主義の父」と称されています。彼は明治時代になり大蔵省の役人となりましたが、予算編成を巡って大久保利通、大隈重信らと対立して退官しました。退官後、自ら国立第一銀行(現 みずほ銀行)設立に関わり総監役に就き、日本最初の銀行を設立しました。その後、製紙、瓦斯、造船、印刷、新聞、保険、鉄道、ホテル、ビール、鉱山、汽車製造、建設、民間の事業会社を興したり、設立に関与したりしました。彼関わった企業は約 500 にも及び、澁澤倉庫、日本銀行、三菱 UFJ 銀行、横浜銀行、JR 東日本、小田急電鉄、京浜急行電鉄、名古屋鉄道、阪急電鉄、いすゞ自動車、IHI、JFE スチール、時事通信、JTB、川崎重工、清水建設、日本経済新聞社、東宝、富士通、日本郵船、日本水産、東京海上日動火災保険、大日本印刷、麒麟ビール、サッポロビール、三越伊勢丹、東京電力、関西電力、東洋紡、カネボウ、住友機械重機、東京建物、帝国ホテル、古河電気工業、アサヒビールなど、現在でも名高い企業をはじめ多くの企業が活動しています。また、彼は、摂善会(現 東京銀行協会)、東京商法会議所(現 東京商工会議所、日本商工会議所)、東京株式取引所(現 東京証券取引所)、大阪証券取引所など、経済団体への設立にも尽力しました。

渋沢栄一は、生活困窮者、孤児、老人、障がい者を保護するため養育院(現 東京都健康長寿医療センター)の運営に関与しました。また、日本赤十字社の前身である博愛社が創設され、直ちに社員(会員)となり、慈善事業を支えました。特に関東大震災の義援金窓口の企画者となり、震災復興の救済活動に打ち込みました。

教育界においても渋沢栄一の功績は大きく、実学教育や女子の高等教育の必要性を唱え、商法講習所(現 一橋大学)、工手学校(現 工学院大学)、大倉商業学校(現 東京経済

大学)、高千穂商業学校(現 高千穂大学)、台湾協会学校(現 拓殖大学)、共立女子職業学校(現 共立女子学園)、東京女学館、日本女子大学校(現 日本女子大学)、日本女子商業学校(現 嘉悦学園)、日本女子美術学校(現 都立忍岡高校)、跡見女学校(現 跡見女子大学)、女子英学塾(現 津田塾大学)、東京女子大学校(現 東京女子大学)、女子美術学校(現 女子美術大学)など創立や運営に関わりました。なかでも渋沢栄一は、一橋大学の前身である東京高等商業学校時の申酉事件で政府との調停役となり東京高等商業学校が存続することとなりました。この渋沢栄一の尽力がなければ、現在の一橋大学は存続しなかったこととなります。

東京高等商業学校の申酉事件について少し説明します。明治政府は 1886(明治 19)年 3 月に公布した帝国大学令により、帝国大学(東大、京大、北大等)以外の大学を認めていませんでした。この頃、横浜市大、早稲田大学、慶應義塾大学の前身も旧制の専門学校でした。当時の一橋大学は先述しているように東京高等商業学校という官立の高等商業学校でしたが、卒業生を対象とした専攻部を設置していました。

1901(明治 34)年欧州留学中の東京高等商業学校の教授がベルリンで商業大学の必要性を建議し、さらに大学を卒業した者に送る称号「学士」を授与し、東京高等商業学校の大学昇格運動を進めていきました。そのようななか 1907(明治 40)年、「商科大学設置に関する建議案」が帝国議会を通過しました。これを受けて桂内閣と文部省は、翌年 8 月から 1909 年 3 月にかけて東京帝国大学内に経済学科・商業学科を設置するとしました。これにより大学昇格運動を進めてきた東京高等商業学校教授 4 名が辞表を提出、校長も問責によって辞職に追い込まれました。さらに文部省は東京高等商業学校と東京帝国大学の商科は不統一感があるので東京高等商業学校を廃止する省令を出しました。東京高等商業学校の商科大学の昇格可能性は断たれ、学生は 1909(明治 42)年 5 月 11 日、学生大会を開催して総退学を決議して抗議することとなりました。神戸高等商業学校(現 神戸大学経済学部)もこれに呼応する動きを見せました。

当時、東京高等商業学校の商議員であった渋沢栄一は、東京商工会議所等の代表であった中野武蔵、父母保証会らと共に調停にあたり、学生の主張である商業大学を一橋に設置すること、それまでの専攻部を存続させることを確認し、その実現に向けて努力すると約束したことにより、学生は無条件で復学することとなりました。この一連の事態は 1908 年から 09 年にかけて両年の干支である戊申および己酉をつないで「申酉事件」と称しています。

そこから凡そ 10 年後の 1920 年(大正 9)、東京高等商業学校は念願の東京商科大学となります。この時の学生の熱気、決意、覚悟などは一橋大学の歴史を辿ると読み取ることが出来ると思います。最後に、渋沢栄一の名言「お金をたくさん集めて、たくさん使うことで社会を活発にし、経済の発展を促すのがよい。お金持ちはよく集めると同時に、よく使わなければならない。」を贈ります。この言葉の通り、彼は、実業界で得たものを慈善事業、教育に費やしたのだと思います。皆さんも「青天を衝け」!